



雪
溶
け
て、
花



水純みを

壺、

揺れる馬車の中、横目で眺めた外の景色がやけに恋しく見えたのは、数えて十の歳になる寒い冬の暮れの日のことだった。

雪化粧で染まった白銀の愛宕山は大きくそびえ立ち、行き交う人々を悠然と米粒ぐらに見下ろしている。その荘厳な美しさに息を呑んでは、不意に伸びた手が狭苦しい空間で虚空をもがき、行き場を失くしてしまう。

声に乗せなければと思っていた言葉は静かに喉の奥へ流れ込み、当たり前に見ていた刹那でさえも寂しさを募らせていくのみだった。

どうして、と口に出せば答えは簡単だが、生まれた順番で勝つことが出来なかった。理由はただそれだけで、それ以上でも以下でもない。偏にこの家に生まれたのなら尚更、愛を求めることなどきつと野暮な話なのだろう。

◇

まるで水のように冷たい能面を被っている人だと、物心ついた頃から酷く畏れていた。意に反すれば我が子の細い首でも簡単にへし折ってしまいうような、そんな狂気を孕んでいたのが、父の宮入威仁みやいりたけひとだった。

微笑はおろか口を開けて大声で笑った顔など、生まれてこの方一度も見たことはない。飄々として掴みどころがなく、感情があまり表に出ることのない近寄り難い存在。

一部の人間からは氷華公爵などと呼ばれ、愛想のなさは界限でもそこそ噂になるほどだった。細身の長身に青白く生気のない面長。禍々しさを秘めた琥珀色の瞳に魅入られれば、誰もが逆らうことはなかった。何もかもが異質に見えて、一方的に抱く印象は実の父親ながら「人ならざる者」という気さえした。

それでも既に年数を共にして感化された長男や母たちは、却って末息子の方がよっぽど異端に見えて仕方ないように、感受性が豊かな次男にとっては息苦しい居場所だった。発言には必ずイエスで応える。それが例え道を外れた非道徳で非常識なことであっても、当主を中心に回っている宮入家では至って当たり前のことだった。

三が日があつという間に終わり新年を迎えて数日が経つた頃、長らくの東京出張から一家の主が帰ってきた。

威仁はこのところ殆ど京に常駐しておらず、専ら高官としての仕事は都へ出向くことで特別に手に入れられているようだった。元より元号が変わり天皇が明治政府と共に東へ奠都してからというもの、もはや執着だけで自ら西に残った者たちに職を選んでいる余裕などはあるはずもなく、例に漏れず宮人家もそれは右に倣って同じであった。

実際、蓄えた貯蓄を切り崩す生活もちょっとは続き、危機を感じるほどではないにせよ、現状維持のために新しくやらなければならないことがいくつか増えることも少なうはない。

しかしこの状況は彼にとって充分想定内らしく、資金繰りに奔走するほどに惨めな暮らしになることは決してなかった。少なくとも宮人家は過不足なく贅沢だできていたし、どんな伝を頼ったか分からないが懐には絶え間なく仕事の流れ込んできた。時には書斎に籠ったままで出てこなくなつたかと思えば、突然飛び出して帝都へ出掛けると身支度を始める始末で、家の者たちは全員が全員、神出

鬼没な当主のことを常に身構えていなければならなかつた。

その日も同様に、久々に現れた凄みのある当主に使用人たちは一步身を引いては、次々に深く頭を下げて出迎えていた。屋敷に来て間もない人間は、ようやくお目にかかった主の風貌に驚きを隠せずにいた。

威仁は一呼吸置いて、玄関口に集まっていた者たちにと「食事の用意を」と蚊の鳴くような細さで告げた。

畳の広がる大広間に陣取つた円卓と座椅子は、異国情緒を煙たがる威仁が唯一知り合いの外国建築家から買った洋物だった。古い景観には似つかわしいほどの伽羅色が、綺麗な弧を描いて一室を占拠している。漆で塗られた椅子の座面には詰め込まれた真綿を覆うように深紅の天鷲絨ビロウドが布を貼っていた。

呼び出された家人たちは続々と集まり、定位置を探すと席に着いた。襖を開けて向かつて左が父、隣が母、長男と次男はそれぞれが両親と向き合うようにして座つた。

運ばれてくる料理は、近頃挿げ替えた料理人が腕よに繕りをかけて作つたものばかりだ。冬の山や海で採れた旬の幸、上級な肉が鮮やかに食卓全体を埋め尽くしていく。

やがて当主の鶴の一声が聞こえ、宴は厳かに始まった。台図を皮切りにそれぞれが品のある手つきで食べ物をよそつては、料理に舌鼓を打ち始める。

全員が揃ったことでえらく気が大きくなった次男は、普段厳しく躰けられていたことをすっかり忘れてしまうほど、早速食事に夢中になっていた。あと何度訪れるか分からない幸せを、どうせなら美味い飯と共に噛み締めていたいと必死だった。家族が集まれば皆がきつと嬉しくて楽しい。それは誰しもが抱く当たり前の感情なのだ、そう思っていた。

「純雪を養子に出すさかい、皆その心積もりでおるようちに」

だが思いとは裏腹に父の口から流れ出た一言は、年端も行かぬ子供にはなんとも酷なものだった。淡々とした暗い音は当の本人である純雪の耳元に響く。

馴染みがなくとも意味だけは知っている。

養子、ようし。

思いつくのは半年ほど前、尋常小学校で勉学を共にした学友の転校が突然決まり、たちまち噂になった時のあの感覚。ある豪商の一人娘は理由もなく突然転校してしまった

が、蓋を開ければ違う家に貰われていったのだと先生たちが言っていた。

「子爵様のお家へ行くそうや」

「結果的には安泰やろうね」

「一人娘やろう？ 親御さんは悩みはったと思うわ」

「そうやねえ、寂しくはなるかもしれないけど」

偶々居合わせたところで密談をしていた彼女らを覚えていた。絶え間ない羨望の眼差しに似た声は、恨めしそうに聞こえた。純雪はその光景を横目に入れながら、養子というものの正体は、とにかく胸がざわつくものなのだと思うた。

家族に福をもたせるとて、あの子は本当に幸せだったのだろうか。居心地の悪さをどうも拭えなくて、焦燥感でいっぱいになったことを片時も忘れず覚えていたのだが、それがまさか今度は我が身に起きることになるとは一体誰が想像できたのだろうか。

足りない頭で考えを張り巡らせても、うまく思考が追いつかない。呆けた鯉のようにして口をばくばくさせながらやり取りを見ていることしかできない。

「おもう様はいけずやなあ。決まったんは何処の家？」